國學院大學学術情報リポジトリ

Religious Diversity in Renaissance Philosophy : Machiavelli, Pico Della Mirandola, Giordano Bruno

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Okamoto, Genta メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000767

ルネサンスの宗教論と多様性の問題
——マキアヴェッリ、ピーコ・デッラ・ミランドラ、ジョルダーノ・ブルーノ

岡本源太

1　ヨーロッパのルネサンスにあって「再生」したものとは、まずは古代ギリシア・ローマの文献の数々であり、そこに書かれていた幾多の知識であった。やがてその範囲は古代のエジプトやペルシア等にまで及んでいく。キリスト教からすれば「異教」とされる教説——しばしばキリスト教の教義とは矛盾するそれ——の記されたおびただしい数の書物が、イタリアから始まってヨーロッパ中に広まる(1)。もっとも、それでキリスト教信仰の正統性が揺らいだわけではない。ルネサンスのヨーロッパ人にとって、キリスト教以外の宗教を信仰するという選択肢はいまだありえないものであった。とはいえ、古代文献の研究によってめざましく発達した文献学の方法は聖書にも適用され、ついには宗教改革を引き起こし、キリスト教自体の分裂を招くにいたった。

このルネサンスにあらわになった宗教的多様性に対して、その発祥地にして中心地であったイタリアでは、いかに向かいあったのだろうか。本論では、キリスト教以前の古代文献の発掘が進んだルネサンス期イタリアの思想家たち、ニッコロ・マキアヴェッリ（Niccolò Machiavelli, 1469-1527）、ジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラ（Giovanni Pico Della Mirandola, 1463-1494）、ジョルダーノ・ブルーノ（Giordano Bruno, 1548-1600）の宗教論を検討し、宗教ひいては思想の多様性を容認するその特異な理論機制を考察したい。文献学・修辞学にもとづいた人文主義的な観点から、彼らは宗教を神の教説というよりも人間の道徳と見なし、歴史的文脈に応じた宗教言説の多様性を認める。とはいえ、それによって単純に宗教を否定したりはせず、むしろ多様な言説と思想をそのままの多様性において保持しようとしたのであった。

もちろん、異教の教説とキリスト教の教義との不一致が問題になったのは、ルネサンスが初めてではない。中世にもいわゆる「二重真理説」の問題が生じていた(2)。十二世紀頃、アリストテレス主義哲学がアラビア経由でヨーロッパに流

入し、霊魂不滅や世界創造を奉じるキリスト教とは合致しないその教説をどう位置づけるか、議論が巻き起こる。ギリシア哲学とキリスト教神学、理性と啓示、知と信は、そのいずれかのみが真理なのか、あるいは双方とも真理であるのか。どちらも対等であるのか、もしくはどちらかが優位にあるのか。一方から他方へと連続しているのか、はたまた他方が一方を棄却するのか――こうした議論のなかで、理性にもとづく論証が示す哲学の真理と、敬虔な信仰において示される神学の真理と、その二つの真理がある、との主張が異端として断罪されることになった。以後、中世のスコラ学は、いくつかの学派に分かれて対立していたにしても、哲学を宗教的信仰にいたる前段階と位置づけたうえで、それらの矛盾点と思えるものを解決しようとした。その解釈学がひじょうに精緻なものにまで発展したことは、周知の通りである。

一見したところ、この中世の問題機制は、ルネサンスにおいてもさほど変わっていないように思える。たしかに異教の文献の範囲は、アラブ＝アリストテレス主義哲学のみならず、プラトン主義・ピュタゴラス主義・ストア主義・エピクロス主義等々の古代哲学の諸学派、オルペウス教やゾロアスター教やイシス崇拝といった古代宗教の数々、またユダヤ教神秘主義たるカバラから、はては占星術や呪術のたぐいにまで拡大した。とはいえ、あくまでキリスト教信仰の正統性が前提にされており、それに対して異教をどう位置づけるかという問題であったことに変わりはなかった。

しかしながら、中世からルネサンスへと、問題を論じる方法が大きく変わる。つまり、中世スコラ学の「注解」から、ルネサンス人文主義の「批判」への変化である(3)。ルネサンスに古代文献の発掘を推進した人文主義者たちは、あわせて古典ラテン語の復興に注力し、そうして中世ラテン語――とりわけスコラ学者たちのラテン語――を「野蛮」だと、つまり破格であり誤用であると非難した。これはたんに言葉づかいの巧拙の問題にとどまるものではない。いかにして真理を語りうるのかという哲学的な問題提起にまで通じるものであった。それは、自由学芸のうちの三科、文法・弁証学（論理学）・修辞学に関して、スコラ学が弁証学（論理学）を重視したのに対し、人文主義が修辞学を重視したことにも看取できる。人文主義者たちによれば、真理は、スコラ学者たちの語るような概念の体系を透明に表象するかのごとき論理的言説においてではなく、言語の歴史上の使用から彫琢された修辞的言説において表される。したがって文献の読解は、文献学の見地から歴史的文脈に位置づけて、その言語使用の修辞学的な意味合いを捉えることでなされるべきだという。異教の教説とキリスト教の教義との関係づけにあたっても、中世スコラ学のように権威にもとづいて注解を重ねることで論理的整合性を付けるという方法ではなく、文献の言語使用を歴史的文脈へと文献学的に位置づけてその修辞的な効果や影響を探るという方法がとられるようになったのである。

この変化はやがて宗教そのものの理解を変質させるにいたっただろう。哲学をあくまで宗教的信仰の前段階と見なした中世に対して、ルネサンスでは宗教のほうが前哲学的なコモン・センスの領域と見なされ、ほとんど人間の道徳と同義のものとされていくのである。もっとも、このような宗教観の転換は、たしかに近世の自由思想や啓蒙主義に多大な影響を及ぼすことになったにせよ、単純に合理化や世俗化としてのみ捉えることはできない。ルネサンスに「再生」した厖大な異教の文献とその知識は、この時代の思想にむしろ神秘がかって迷信じみた怪奇な相貌を与えてさえいる。はたしてルネサンスの人間は合理的であったのか否か——と問うのは、しかしながら当を得ていない。ルネサンス人は意外と実利的で現世的であったとか、その逆に存外に迷信深くて馬鹿げたことを信じていたとか、そのような評価を下すことは本論の目的ではない。本論では、今日的な評価基準でもってルネサンスの宗教論が合理的か否かを判定するのではなく、矛盾し対立しあう知識が氾濫するなかでいかにそれらを関係づけて共存させたのかという、ルネサンスのイタリア人たちの知的努力のほうに注意を向けたい。そうして、思想の多様性が容認され擁護されていったそのいくぶん特異な理論の機制に光を当てたいと思う。

2　文献学と修辞学の観点を根本に据えたルネサンス人文主義の方法は、宗教を、その教義の真偽や当否には踏み込まずに、もっぱらその政治社会への影響の点でのみ論じることを可能にした。これは、言うなれば、宗教を神の教説というよりも人間の道徳として考える態度である。そのきわめて大胆な例は、ニッコロ・マキアヴェッリ『ディスコルシ』（1531）からジョルダーノ・ブルーノ『傲れる野獣の追放』（1584）にまで見いだせる。マキアヴェッリもブルーノも、宗教がどれほど社会秩序の安定に必要不可欠なものであるかを論じ、その模範を古代ローマの宗教に求め、転じてルネサンスのキリスト教の問題点——マキアヴェッリはカトリック教会の、ブルーノは主にプロテスタント諸派の、という差異はあれ——を挙げるが、その称讃も非難もあくまで政治社会への影響という点にしか関わっていないのである。

マキアヴェッリは、古代のティトゥス・リウィウスの文献を読み解きながら、『ディスコルシ』第１巻第11章から数章にわたって、また第２巻第２章でも、宗教がいかに国家の統治にとって重要なものであるかを論じている。その際、古代ローマで建国者ロムルスのあとを継いだヌマ・ポンピリウスが宗教を国家の基礎にしたことに言及している。

> 彼は、人民が粗暴このうえないのを見て、彼らを平和的な手だてで従順な市民に引き戻そうとして、宗教に注目した。文明を維持したいのなら必要不可欠なものとしての宗教に、である。そして数世紀経つうちに、この国家ほど

> 神を畏敬するところはない、というほどのものにした。こうして、ローマの有力者や元老院が企てたどの事業も容易に運ぶようになったのである。(4)

マキアヴェッリによれば、どれほど有徳な指導者であれ、そしてどれほど有益な法律制度であっても、たった一人の人間が万人を説得して新しい法律制度にしたがわせることは至難の業である。しかし、万人が神を畏怖しているところであれば、そこに神の名のもとに新しい法律制度を与えると、皆がそれに従順にしたがう。「一人の思慮深い者にはひじょうによいものと分かっていても、それ自体では他者たちを説得できるほどの明白な理由がなかったりする。そこで賢い人は、この困難を取り除こうとして、神に訴える(5)」。それゆえヌマは、宗教を国家の基礎に置くことで、古代ローマに優れた法律制度が整えられる基盤をつくった。

> したがってこれらすべてを考慮すれば、ヌマのもたらした宗教がこの都市の幸福の第一の原因であった、と結論できよう。なぜなら、宗教がよき秩序をもたらし、よき秩序がよき運命をもたらし、そしてよき運命から諸々の事業の幸福な成功が生じたからである。神の崇拝の遵守が国家の偉大さの原因であるように、神の崇拝の軽視が国家の没落の原因なのだ。神への畏敬がないような王国は崩壊するほかなく、さもなくば、宗教の欠落を埋め合わせできるだけの一人の君主への畏敬によって支えられるほかない。君主には短い生命しかないのだから、彼の能力が失われるにしたがってすぐさま王国も傾かざるをえない。(6)

指導者たる人間の能力のみに依拠した国家の秩序はきわめて脆弱であり、ゆえに宗教の支えが必要不可欠である、というわけである。この点で古代ローマの宗教がいかに模範的であったかを説く彼は、翻って、ルネサンスのイタリアの諸国家の脆弱さの原因をキリスト教カトリック教会のありように求める。「われらが宗教の指導者たるローマ教会に近しい人々ほど宗教を失っている(7)」、「この教皇庁の悪例によってこの地域はまったく信心や宗教を失って、果てしない不都合と無秩序に引きずり込まれてしまっている(8)」、「ローマ教皇庁を、それがイタリアで有している権威もろともスイスの地に住まわせれば、スイスは今日でも古代にしたがった宗教と軍事秩序を生きている唯一の人民だが、すぐさま教皇庁の悪習がこの地域でも無秩序をもたらすのを見ることになろう(9)」と、彼は書き連ねる。

とはいえ、マキアヴェッリがキリスト教を捨てて古代ローマの異教を信仰すべきと主張しているように理解するのは、早計であろう。たしかに、彼の厳しいローマ教皇庁批判はときにキリスト教自体を批判しているとも見えかねないし、さらに「国家を宗教的に保つのに役立ちそうなものはすべて、たとえ偽りのものと思

われるとしても、引き立てて盛り上げていかねばならない[10]」との文言を読むと、ともすれば彼が宗教自体を人民を騙す詐術と見ているようにさえ思えるかもしれない。実際、後世の自由思想家や啓蒙主義者はそのように読んだのではあった。しかしながら、彼がキリスト教信仰の正統性そのものを問いに附した形跡はない。彼自身のキリスト教信仰がいかなるものであったのかについては、長きにわたる解釈と論争が重ねられており、いまだ決着を見ない[11]。それというのも、彼が宗教の教義それ自体の当否には言及していないからである。ルネサンスの人文主義者たるマキアヴェッリにとっては、どの宗教が正しいのか、あるいはそもそも宗教が正しいのかは問題ではなく、もっぱら宗教が歴史上もたらした政治社会への効果と影響のみが考察すべき対象であったろう。

そのように宗教を政治社会への効果と影響という世俗的な水準でのみ論じる態度は、ブルーノにいたればいっそう先鋭化される。ブルーノは『傲れる野獣の追放』で、マキアヴェッリと同様に、古代ローマ人たちが法と宗教を重んじたがゆえにあのような品行と偉業、名誉と幸福がもたらされたと述べている[12]。そしてまたマキアヴェッリと同様、「市民の交際にとって人間の法や憲章は充分でなく、神々はその神的な法によって援助する[13]」のだとして、「神的な法」たる宗教を、人間の社会秩序にとって必要不可欠な基礎だと見なしている。しかしブルーノはそれにとどまらず、マキアヴェッリよりもいっそうはっきりと、宗教があくまで人間の共同体のための法であることを明言する[14]。ブルーノにしたがうなら、宗教は神ではなく人間自身の利益のみを目的としており、ただ道徳的に行動することを命じるものにほかならない。

> 神々は、人間たちが配慮できるもののみを配慮するのであって、国家を維持するための敬意を損なうものでなければ、人間たちによって行われ、言われ、考えられたことに動揺したり立腹したりなどしません。考えてもみてください、人間たちが行ったり考えたことに快や不快、悲しみや喜びを覚えるようであっては、そんな神々は神々でないでしょう。〔……〕ですから、神々が人間たちに敬意、畏怖、愛、礼拝と崇敬を求めるのは人間たち自身の利益とは別の目的のためだ、などと考えるのは不適切で、愚かで、冒涜的で、非難に値します。考えてごらんなさい、神々はそれ自身でもっとも栄光に満ちた存在であり、外部から栄光を付け加えることなどできません。神々が法をつくったのは栄光を受け取るためでなく、人間たちにも栄光を共有させるためなのです。ゆえに、もし人間たちが他の人間たちに対して道徳的に行動することをもっぱら命じて認めることから離反してしまうなら、そのような法と裁きは、法と裁きの善性および真理から懸け離れているでしょう。[15]

それゆえ、「人間たちが共生するための実践を命じない法は、どんなものも受

け入れられるべきではない[16]」、「この最良の目的へと導いてくれる有用性も利便性ももたらさない法や制度などというものは、天から降ってきたものだろうと、地から湧いたものだろうと、承認されるべきでも受け入れられるべきでもない[17]」と彼が主張するとき、これは「神的な法」としての宗教にも当てはまるものである。ブルーノがカルヴァン派はじめ当時のプロテスタントの諸宗派をきわめて辛辣に批判しているのは、プロテスタントの予定説や信仰義認説が宗教から善行を切り離してしまったからだ。ブルーノにとっては、宗教はあくまで人間の共同体のための法、人間たちの共生の実践の基盤であるがゆえに、善行を勧めない宗教はそもそも宗教ではないのである。

こうしてブルーノははっきりと宗教を、神の教説というよりも、まずもって人間の道徳として理解するにいたる。そして彼はここからさらに宗教と哲学の区別を再考している[18]。彼がコペルニクスの地動説を大胆に敷衍することで提唱した無限宇宙論は、もちろん聖書の記述と矛盾するものであった。しかし、ブルーノによれば、哲学は真理を求めるものであるが、対する宗教は善行を命じるものであって、それらの言説のあいだに矛盾があったとしても何ら問題はないという。

> われわれの知性に差し出されている聖書には、哲学でなされるような自然の事物をめぐる証明も思弁も扱われていません。そこではむしろ、われわれの精神と感情にもとづき、道徳的な行動の実践が法によって命じられているのです。神聖なる立法者が目指していた目的はただそれだけであって、そのほかに真理にしたがって語ろうなどとはしていません。庶民に悪を避けさせ、善を守らせるのに、真理は役立ちません。そうしたことを考えるのは、むしろ観想的人間に任されています。神聖なる立法者は、庶民に対しては彼らの考え方と話し方にあわせて、主要な事柄を理解させるように話したのです。[19]

真理の探究は「観想的人間」たる哲学者にのみ任されており、対して万人にとって必要な道徳的な行動の実践は、万人に理解できる仕方で聖書において命じられている。真理を理解する能力のない庶民にも分かるような語り方で聖書は書かれ、学問的真理に照らせば誤謬と見えかねない記述があるが、しかしそれはそもそもの目的が哲学と宗教とで異なるがゆえの修辞的な相異にすぎないと、ブルーノは見なす。ここで、中世における二重真理説の問題機制が変質していることに注意したい。哲学＝理性が示す真理と神学＝啓示から示される真理をいかに関係づけるかという問題自体が、ここでは消滅してしまっている。後にスピノザが辿ることになるものと近しい道筋でもって[20]、ブルーノは宗教をもっぱら人間の道徳へと還元し、真理の探究としての哲学から分離するのである。

３　宗教を人間の道徳としてのみ考える態度は、それを歴史的文脈に差し戻して理解するというルネサンス人文主義の方法と不可分のものである。歴史的に見るなら、時代や地域が異なれば当然のこと宗教もまたさまざまに異なっている。そこからブルーノは、神の名前と表象はそのときどきの一時的で便宜的なものにすぎない、と主張する。彼によれば、ゼウスにせよアプロディテにせよ、神々はもともと人間であった。

> 考えてみてください、皆がよく知っているように、ゼウスはクレタ島の王という死すべき男であり、ほかすべての男と同じく腐敗して灰になる身体をもっていました。アプロディテが一人の死すべき女、キュプロス島のこのうえなく美しく優美にして鷹揚な、きわめて魅力的な女王であったことも、いかなる隠しごとでもありません。ほかすべての神々も同様に理解してください。それらの神々もまた人間として知られていたのです。(21)

そのような一介の人間にすぎないものが神とされたのは、その人間自身が崇拝されたからではなく、その人間のなかに威厳や正義などの神的徳が見いだされたがゆえに、便宜的にその人間の名前で神が呼ばれたからだという。「ゼウスが神性であるとして彼を崇拝したのではなく、ゼウスのなかにいるものとして神性を崇拝した(22)」のであり、「礼拝されたのは神性の名前と表象にほかならなかった(23)」というのである。時代と地域が変われば同じ徳が別の名前と表象で示されるし、翻って、異なる時代と場所であっても同じ名前と表象がもちいられてかまわない。

つまり、宗教の差違は歴史的状況の相異によるものにほかならず、そのどれもが、ブルーノにしたがうなら、結局はこの自然に多種多様にあらわれでている唯一の神的存在を崇拝している。「永遠なる神格は（神的実体にとっての真なるものに反するような不都合を何ももたらすことなく）別の時代と別の国民にあってはまた別の一時的な名前をもつ(24)」のである。

ブルーノの名高い言葉「自然とは事物の内なる神である(25)」は、そのようにして宗教の多様性を説明するものだ。「万物のなかに見いだされる一つの単純な神性、宇宙の維持者たる豊饒な母なる自然は、さまざまにみずからを伝達するのに応じて、さまざまな基体のなかで輝き、さまざまな名前をとる(26)」と、ブルーノは述べる。

> ですから、この神は絶対者としてはわれわれと関係をもたず、むしろ自然の諸結果へとみずからを伝達するかぎりでわれわれに関係します。そして、自然それ自体以上に内なるところにいるのです。神は自然それ自体ではなくまさに自然の自然であり、魂そのものでないにしても世界の魂の魂なのです。

それゆえ、特有の理由で神の助けを得たい者は、特定の種の道を通って神のまえに進み出なければなりません。ちょうどパンが欲しい者はパン屋に行き、ワインが欲しい者は酒蔵の番人のところへ、果物を欲する者は庭師のところへ、学生が教師のところへ行くようなものです。ほかすべてについても同様です。一つの善性、一つの幸福、あらゆる富と財産の一つの絶対的原理が、さまざまな理由へと収縮されて、個別の要求にしたがって贈りものの数々を撒き散らすのです。ここから、なぜ滅び去ったエジプト人たちが大地や月や太陽やそのほかの天体のみならず、鰐や蜥蜴や蛇や玉葱を崇拝したのか、推し量ることができるでしょう。(27)

かくして、さまざまな宗教をその歴史的文脈に差し戻すというルネサンス人文主義的な観点は、ブルーノによって独自の存在論的基盤を与えられる。名称や表象は時代と地域に応じた一時的で便宜的なものにすぎないという――ルネサンス人文主義らしい修辞学的な観点からの――指摘は、そのいずれもがそれぞれの仕方でこの無限宇宙をかたちづくる神的自然をあらわしているという発想によって基礎づけられ、多種多様な宗教のあらわれを肯定するにいたる。「万物のなかに見いだされる神性、これは無数の仕方でみずからを拡散し伝達し、そのように無数の名前をもち、そして人々はそこから無数の類の恩恵を懇願するがゆえに無数の儀礼でもって讃え崇めながら、無数の道を通って、おのおのに固有の適合した根拠でもって、探究する(28)」というのである。

宗教をもっぱら人間の道徳と見なす発想はマキアヴェッリからブルーノへと先鋭化されていったが、それとともに、このような多様性を共存させる理論が展開されていったことも看過すべきでない。唯一の神性が多種多様に語られ表されるとの立論は、ブルーノ以前に、ジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラが練り上げたものであった(29)。「どんな人の言葉にも誓いを立てることなく、哲学のあらゆる師匠を介して自己を形成し、あらゆる書物の頁を探索し、あらゆる学派を認識しようと決心した(30)」ピーコは、古今のさまざまな哲学と宗教の教説が矛盾し対立しあっているのを調停し、和解させるべく、『九〇〇箇条の提題』(1486)を著して、ローマでの討論会を企画した。彼のもっとも知られた著作『人間の尊厳について』は、この討論会の開会演説の原稿として準備されたものである。

中世ヨーロッパの神学者と古代ギリシアの哲学者の諸派にとどまらず、古代ペルシアの宗教者に中世アラビアの哲学者、カバラ主義者から呪術師のたぐいまでの教説を包摂しようとしたピーコのこの試みは、いかにもルネサンス哲学らしい折衷主義の典型とも見えよう。しかし注意すべきは、彼による諸学派の調停が、一つの正しい言説を決定するのではなく、矛盾する多種多様な言説が「両立する(31)」のを示す試みであったことだ。『九〇〇箇条の提題』のうちの「哲学に新しい教説を導入する私自身の意見による七一の逆説的提題」で、彼はアリストテ

レスの提起した三つの論証方法——原因による論証・結果による論証・端的な論証——のほかに、第四の論証方法として「互換性による論証」を提起し、これがもっとも強力なものであるとしている(32)。彼はルネサンスの人文主義者らしく、まずは諸々の教説に使われている術語の意味合いを腑分けし、そうして諸学派のあいだの矛盾や対立を言葉の上でのものにすぎないとして解消していく。諸言説が互換的であることを示して、両立させるのである。言葉の意味は一義的に定義できるものではなく、文脈に応じて多様に変化し、そのような可変性こそが言葉の力なのだ。だからこそピーコは、プラトンの第七書簡を踏まえながら、真理は直接的に語られるものではなく、諸々の教説の比較対照から火花のように閃くものとするだろう。

> もしある学派があって、より真なる教説を攻撃し、才知ある者のよき訴えを挫こうとしても、その学派は真理を堅固にはしても薄弱にはしませんし、またあたかも扇に煽られて揺れ動く炎のように、真理を燃え立たせはしても消し去ることはありません。この理由によって動かされて、私は、一つだけ——いくらかの人々がそうしたがったように——でなく、あらゆる教説を公にしようと思いました。ここで多くの学派を比較し、さまざまな哲学を議論することによって、プラトンが『書簡集』で言及しているあの真理の火花が、われわれの精神に、あたかも沖合から昇る太陽のようにいっそう明るく輝くようにと願ってのことです。(33)

ここでさらに重要なのは、ピーコが『人間の尊厳について』でこのような調停の試みを一つの「訓練」であるとしていることだ(34)。今日ではルネサンス人文主義のマニフェストとも見なされている『人間の尊厳について』は、いかなる固有性ももたず、まるでカメレオンのごとくありとあらゆる存在者に変身することのできる人間本性の称讃から始まる(35)。だが続けてすぐさま、この人間本性の不定形性をそのままにしておくのではなく、精神を訓練することで獣性を脱け出して神的な境地へといたるべきだと説かれる(36)。この訓練には三つの段階があり、第一は「道徳学」と「弁証学」、第二は「自然哲学」、第三が「神学」であるという(37)。まずは道徳学の訓練によって感情の動揺を、弁証学の訓練によって理性の混乱を鎮め、ついで自然哲学の訓練により多種多様な見解の矛盾から来る不和を鎮め、ついには神学において平安を得る——こうした訓練の目的や進展のありようそのものは、キリスト教の伝統においてさして目新しいものではない。訓練の結果として行き着く神学がつまるところ無限なる神の語りえなさを示すという点も、中世以来の神秘神学を継承するものである。だが、この三つの段階が聖書・ギリシア哲学・ゾロアスター教・カバラ等々の語法でもって次々と言い換えられていくところに、ピーコ哲学の特異さが示されていよう。神の語りえなさ

に一足飛びに到達することはできず、語りえない神にまで達して平安を得るためにも、まずはありとあらゆる学派の語法を訓練によって身につけねばならない。彼が聖書の雅歌の語法をもちいて語るところでは、人間の魂は「多種多様な哲学説をいわば婚礼衣装の金襴の衣として身にまとい(38)」、神を迎え入れるのである。つまり、この訓練は一つの正しい言説を見つけるためのものではなく、多様な語法を使用できるようになることに主眼があり、それこそが神から授けられた人間本性の不定形性、人間の自由、を体現する。そして人間が神的なものに達しうるとすれば、それはあらゆる語法がそれぞれに語りながらいかなる語法によっても語り尽くすことのできない神に、この人間本性の不定形性とそのあらわれとしての言説の多様性が照応することによってなのである(39)。

このようなピーコの人間と神をブルーノは、ルネサンス自然主義の動向を極限にまで押し進めることによって、自然へと置き換えたであろう。ブルーノの神は、自然そのものではないが、「自然の自然(40)」と言われ、実のところ自然の似姿である。それはちょうど、ブルーノの自然が、神それ自身ではないが、神の似姿であり、「一人子たる自然(41)」と呼ばれていることに対応している。ブルーノ哲学にあっては、自然が神の似姿であるのと同じほど神は自然の似姿なのであり、神と自然は互いに互いを映し合う無限なるものであって、その外部はない。ピーコが多様な教説をどれも否定せず、そのすべてを発明しうる人間およびそのすべてによって示される神によってそれらの多様性を肯定したように、ブルーノは人間を包摂し神が内在する自然において、その自然のあらわれたる宗教の多様性を肯定したのである(42)。

マキアヴェッリ、ピーコ、そしてブルーノと、ルネサンスの宗教論はかくしてキリスト教の教義と異教の教説との不一致という問題を解決し、宗教ひいては思想の多様性を理論的に根拠づけた。ルネサンスにおいて宗教は、まずは人文主義的な観点から、神の教説としてよりも人間の道徳として理解されていった。そして善行の実践としての宗教は真理の探究としての哲学から分離され、宗教の言説はもっぱら人間たちに共生の実践を命じる修辞的言説と見なされていく。だからこそ宗教は時代や地域に応じてさまざまな語り口を取り、神々の名称と表象もさまざまに変化する、というわけである。とはいえ、これはけっして宗教を虚偽の言説として批判しようとしたものではなく、それどころかむしろ多様な宗教言説をそのままの多様性において保持しようとしたものであった。もちろん、唯一の神性が多様にあらわれでるという議論を支えにしているかぎりで、それは結局のところキリスト教的な一神教の発想にそのほかあらゆる宗教を還元するものであった、と言えるかもしれない。しかしながら、多様な宗教のあらわれがそれによって肯定されるにいたったことは、たしかにルネサンスの新しい出来事であり、そしてまたこれは――ブルーノ哲学に典型的に示されているように――キリスト教そのものの変質をともなわずにはありえないことであった(43)。

（1）Cf. Edgar Wind, *Pagan Mysteries in the Renaissance*, Revised and Enlarged Edition, New York, W. W. Norton & Campany, 1968（1958[1]）〔エドガー・ウィント『ルネサンスの異教秘儀』田中英道ほか訳、晶文社、1986年〕；伊藤博明『ルネサンスの神秘思想』、講談社学術文庫、2012年

（2）Cf. Étienne Gilson, *Études de philosophie médiévale*, Strasbourg, Commission de publications de la faculté des lettres, 1921, pp. 51-69；川添信介『水とワイン』、京都大学学術出版会、2005年

（3）Cf. Eugenio Garin, *L'umanesimo italiano*, Roma, Laterza, 1994（1952[1]）, pp. 18-24.〔エウジェニオ・ガレン『イタリアのヒューマニズム』清水純一訳、創文社、1960年、13～18頁〕；Cesare Vasoli, *La dialettica e la retorica dell'Umanesimo*, Milano, Feltrinelli, 1968；Tristan Dagron, "Plurilinguisme philosophique et crise du concepte：le moment humaniste," *Réforme, Humanisme, Renaissance*, nº 64, 2007, pp. 11-29.

（4）Niccolò Machiavelli, *Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio*, a cura di Francesco Bausi, Roma, Salerno, 2001, t. 1, pp. 76-77.〔ニッコロ・マキアヴェッリ『ディスコルシ』永井三明訳、ちくま学芸文庫、2011年、78～79頁〕

（5）*Ibid*., pp. 79-80.〔同書、81頁〕

（6）*Ibid*., p. 81.〔同書、82頁〕

（7）*Ibid*., p. 86.〔同書、86頁〕

（8）*Ibid*., p. 87.〔同書、87頁〕

（9）*Ibid*., p. 87.〔同書、89頁〕

（10）*Ibid*., p. 84.〔同書、85頁〕

（11）Cf. 石黒盛久「マキアヴェッリの宗教――その政治神学における暴力と愛」、『金沢大学歴史言語文化学系論集――史学・考古学篇』第11号、2019年、49～67頁；同「マキアヴェッリにおける「暴力と宗教」再考」、『石川県立大学研究紀要』第３号、2020年、65～71頁

（12）Giordano Bruno, *Spaccio de la bestia trionfante*［1584］, in *Dialoghi filosofici italiani*, Milano, Arnoldo Mondadori, 2000, p. 544.〔ジョルダーノ・ブルーノ『傲れる野獣の追放』加藤守通訳、東信堂、2013年、115頁〕

（13）*Ibid*., p. 541.〔同書、112頁〕

（14）Cf. 岡本源太『ジョルダーノ・ブルーノの哲学』、月曜社、2012年、100～102頁

（15）Bruno, *Spaccio de la bestia trionfante, cit*., pp. 541-542.〔ブルーノ、前掲『傲れる野獣の追放』、111～112頁〕

（16）*Ibid*., p. 539.〔同書、109頁〕

（17）*Ibid*., p. 539-540.〔同書、110頁〕

（18）Cf. 岡本、前掲書、108～110頁

（19）Giordano Bruno, *La cena de le ceneri*［1584］, in *Dialoghi filosofici italiani, cit*., p. 91.

（20）Spinoza, *Tractatus theologico-politicus*, in *Opera*, III, Heiderberg, Carl Winter Universitätsverlag, 1972.〔スピノザ『神学・政治論』吉田量彦訳、光文社古典新訳文庫、2014年〕

（21）Bruno, *Spaccio de la bestia trionfante, cit*., p. 633.〔ブルーノ、前掲『傲れる野獣の追放』、238頁〕

（22）*Ibid*.〔同書〕

（23）*Ibid*., p. 634.〔同書〕

（24）*Ibid*.〔同書〕

（25）*Ibid*., p. 631.〔同書、235頁〕

(26) *Ibid*., p. 634.〔同書、239頁〕
(27) *Ibid*., pp. 636-637.〔同書、241～242頁〕
(28) *Ibid*., p. 635.〔同書、240頁〕
(29) Cf. Tristan Dagron, *Unité de l'être et dialectique. L'idée de philosophie naturelle chez Giordano Bruno*, Paris, Vrin, 1999, p. 45-80；*Id*., "Plurilinguisme philosophique et crise du concepte：le moment humaniste," *cit*., pp. 21-29.
(30) Giovanni Pico Della Mirandola, "De hominis dignitate," in *Œuvres philosophiques*, Paris, PUF, 1993, p. 46.〔ジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラ『人間の尊厳について』大出哲ほか訳、国文社、1985年、50頁〕
(31) Giovanni Pico Della Mirandola, *Conclusiones nongentae*, in Stephen Alan Farmer, *Syncretism in the West*, Tempe, Ariz., Medieval & Renaissance Texts & Studies, 1998, p. 402.
(32) *Ibid*., p. 412.
(33) Pico Della Mirandola, "De hominis dignitate," *cit*., pp. 48-50.〔ピーコ、前掲『人間の尊厳について』、53～54頁〕
(34) *Ibid*., p. 42.〔同書、46頁〕
(35) *Ibid*., pp. ２-12〔同書、13～20頁〕
(36) *Ibid*., pp. 12-16.〔同書、20～24頁〕
(37) *Ibid*., pp. 16-37.〔同書、25～41頁〕
(38) *Ibid*., p. 24.〔同書、31頁〕
(39) Cf. 伊藤博明「「神的な闇」と人間――偽ディオニシウス・アレオパギタ『神秘神学』のピコ・デッラ・ミランドラにおける受容について」、『中世思想研究』第30号、1988年、87～94頁
(40) Bruno, *Spaccio de la bestia trionfante, cit*., p. 636.〔ブルーノ、前掲『傲れる野獣の追放』、242頁〕
(41) Giordano Bruno, *De la causa, principio et uno*［1584］, in *Dialoghi filosofici italiani, cit*., p. 248.〔ジョルダーノ・ブルーノ『原因・原理・一者について』加藤守通訳、東信堂、1998年、128頁〕
(42) このようなブルーノの宗教論が、その後、ジョン・トーランドによる汎神論へと発展的に継承されたことについては、次の拙論を参照されたい。岡本源太「ジョン・トーランドによる汎神論の発明――ジョルダーノ・ブルーノの哲学の継承」、『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第51号、2021年３月、１～14頁
(43) 本論は、日本倫理学会第71回大会（オンライン、2020年10月３日）の主題別討議「イタリア思想の再検討」での提題「ルネサンスの宗教論と多様性の問題――ピーコ・デッラ・ミランドラからジョルダーノ・ブルーノまで」を発展させたものである。討議に招待してくださった司会の山田忠彰氏、同じく提題者の佐々木雄大氏と江川純一氏からは、貴重な指摘と示唆をいただいた。記して感謝申し上げたい。また当日の質疑応答に参加してくださった方々にもお礼申し上げる。